日本の産業景観を楽しむ

小松原　尚

講演の趣旨

国際観光の流動頻度をみると、観光客の出発地と目的地は圏域レベルの限定的なものが多い。わが国との関連性ではアジア、中でも東アジア、その中でも中国の訪日観光客は大きな市場を形成している。観光サービスの需要者はリピーターとなる場合には新たなより高次のサービス財の提供を期待しての訪日となる。中国からのインバウンドにあっても、いわゆる「爆買」段階を経て新たな観光に関心が高まりつつあり、わが国にあっては新段階への対応は課題となっており、それは多様な需要への対応体制を進めることである。その選択肢の一つとして、近年、産業観光として関心の高まっている工場景観の素材と楽しみ方について紹介してみたい。

尚、本講演は、2017年10月15日に奈良県立大学を会場として、本学と上海師範大学中日人文地理観光研究所との共催で行われた、「アジアの国際観光交流について」をテーマとする国際セミナーin奈良にて発表したものである。

１．産業観光を楽しむ観点

産業観光を楽しむための観点としては３点挙げておきたい。

まず１つ目は、「目線」である。見学・観察する場合にアイポイントが高い位置にかるのか、それとも低い位置にあるかが重要である。工場は一般的には立ち入り禁止の場所であるので、日常生活の目線からでは内部を覗くことは不可能に近い。そこで、高い位置から覗くことのできる方法を考えてみる。それは、鉄道や道路の高架部分、や丘陵地から俯瞰することである。また、同じ高さでも、遮蔽物のない場所から眺めるのも一つの方法である。例

えば、港湾地区の工場地帯を海上から観察することである。

次に２つ目は、観光に利用する交通手段である。上述の観点と組み合わせると、道路の高架や丘陵地から眺めるのであれば、自動車の活用が考えられるし、高架で、かつ日常的に公開されない場所からということになれば、鉄道を利用して車内・客席から眺望を楽しむこともできる。また、海上から覗くとすると、船舶の利用が便利である。

最後に３つ目は、時間帯である。日中はもちろんのことだが、近年は「工場夜景」にも関心の高まりをみており、夜間も工場景観を楽しむ有効時間帯になっている。

上記の３つの観点からの産業観光、中でも写真撮影を楽しめるようになったのは、写真機の機能が向上し、明暗を問わず撮影可能になったこととそのイノベーションの成果が普及し、多くの人々がそれを利用できるようになったことである。また、画像の編集も容易になった。パーソナルコンピューターの普及に伴い、写真編集用ソフトウェアを利用すれば、だれでも画像の切り取り、明暗や色調補正ができるようになったことも大きい。

２．石油化学コンビナートの写真撮影

ここで、石油化学コンビナートを対象に事例を紹介してみよう。

まず最初は、瀬戸内海の臨海工業地帯を構成する周南市のコンビナートである。同市は工場夜景を貴重な観光資源として位置づけ、2011年から陸上や海上から工場の夜景を鑑賞するツアー、夜型観光の推進に取り組んでいる(①)。JR新幹線の車中で、徳山駅周辺に展開する石油化学コンビナート工場群を撮影したものである。図面上の2枚は、2011年９月26日午後７時頃、下の２枚は、2016年５月23日午前10時頃にそれぞれカメラに収めた。前者は日本ゼオン、後者は出光グループの石油化学関連工場である。上の２枚は明暗の調整を施し、工場の輪郭を光でわかるように試みた。また、下の２枚のうち左のものは、画像の一部分を切り取り余剰ガスの有毒化を防止するためそれを燃焼させている炎であるフレアスタックを構図に収めた。これは石油化学コンビナートを象徴するものである。

周南（徳山）　新幹線から昼も夜も

川崎 工場夜景バスツアー

次に、川崎市の事例にふれておこう。川崎市の臨海部に展開する京浜工業地帯。多数の工場が密集するこの地域では、夜を迎えると様々なプラントに作業用の明かりが灯る。上左の写真のような、この夜間景観（夜景）は今、「工場夜景」として注目されている。2008年に川崎産業観光モニターツアーの一貫として「ドラマチック工場夜景ツアー」を試験的に行い、その反響を受け、2010年４月から民間会社の協力を得てバスツアーの定期運行を開始した。この工場夜景ツアーには、市民ガイドの「工場夜景ナビゲーター」が添乗し、参加される皆様に川崎の工場夜景の魅力を伝えている(②)。

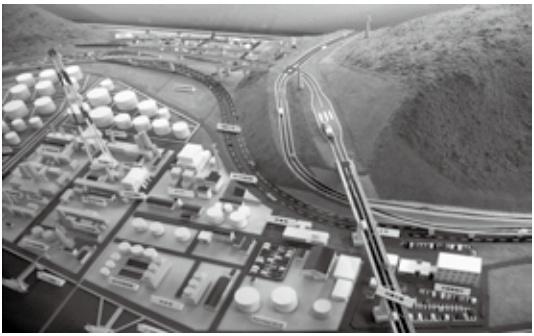
2014年３月19日午後7時からのバスツアーへの参加者は、いわゆる工場夜景ファンのみならず、写真上右のような務め帰りの中高年、日にもよるが、若いカップルの利用もある。そして、写真下2枚に示したように、国道高架からの眺めは星空のようでもあった。

最後に、四日市市の事例を紹介しておく。2010年7月より「四日市コンビナート夜景クルーズ」が行われている(③)。

四日市 コンビナート夜景クルーズ

2017年９月30日午後７時より、始まって７年目になる四日市コンビナート夜景クルーズ60分プランに参加した。写真上左の四日市港湾で活躍する四日市ポートサービス保有の「第二志ほかぜ」（全長19m 定員35名、船室座席数18席）に乗船して、コンビナート景観人気のスポットを観覧するクルーズである。コンビナートOBのボランティアガイドが四日市港の歴史や、コンビナートにまつわる様々なエピソード、現在の四日市コンビナートの取り組みや環境対策など、夜景だけではないコンビナートの魅力をご案内いただいた（④）。写真下の２枚はその時撮影のものを明暗や色調補正を施したものである。出発までの待機所には、写真上左のようにお菓子や写真集など夜景クルーズに関連する多様な商品もお土産として展示・販売されていた。例えば、夜景クルーズお土産として紹介・配布された、夜景クルーズタルトクッキーは、星型のクッキーの中にホワイトチョコレートが入っており、パッケージもクルーズ画像であった。

石油精製所　室蘭



写真は、2009年２月18日に室蘭の産業観光のバスツアーに参加の際に撮影したものである。主な立寄り地点は、製鉄所とこのエネオスの石油精製所であった。見学地点として、製鉄所と比較してみると、精製プラントは、パイプラインがはりめぐらされ、その中をバスで回るだけのもの、人を見かけることもほとんどなく、無機的な構内に何かもの足りない感想を抱いた。当然ながら写真撮影は禁止であった。会社の説明で、自然環境への配慮に力点をおいた活動も紹介された。ただ全体的には工場見学の限界性を呈しているように考えられた。

産業観光は、上述のような工場見学の他にも、近代化遺産にも含まれる産業遺産の見学、工場用地の用途変更による新たな集客拠点の創造などその要素は多様である。こうした脈略の中で、産業景観としての石油化学コンビ

ナートへの関心の高まりが生じるのも頷けるのである。工場敷地の中で見る石油化学工場とは違った、外からの異なった視点でみることで、プラント群に新たな観光資源としての価値が生じたといえる。

報告者が化学工場の施設群を対象にした観光に興味をもつきっかけは、阪神電車の車両の中の１枚の吊り広告であった。「沿線百景」というシリーズの一つで「電車で行ける近未来」というキャッチコピーを付けてあった。そして続けて次の文章が記されていた。

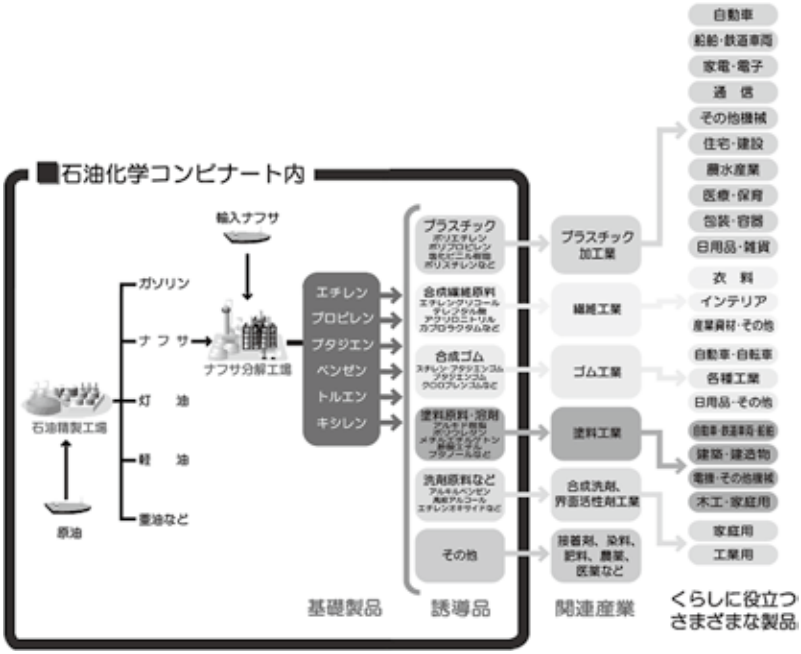
阪神電車の吊り広告

兵庫から大阪にまたがる阪神工業地帯など臨海地帯に立ち並ぶ工場群が、観光スポットとして注目されています。オレンジや薄緑色の照明に浮かび上がる巨大タンクや煙突、複雑に絡みあう配管―。どこかノスタルジックでいて近未来を感じさせる景色に熱中することを、ファンの間では工場萌え呼ぶのだとか。昼の暑さがやわらぐ頃、夕涼みがてら家族で「近未来ツアー」にでかけてみませんか。無骨な鉄の塊と思っていたコンビナートが、スペクタクルに満ちたSF映画の舞台に見えてくるから不思議です。

ここで、石油化学コンビナートに関して説明しておこう。石油化学工業協会の資料によると、石油精製工場、ナフサ分解工場、様々な石油化学誘導品工場が一つの場所に集まっているところをいう。

工場の間は多数のパイプライン（配管）で結ばれていて、様々な原料や製品がやりとりされている。日本には９つの地域（大分、周南、岩国・大竹、水島、大阪、四日市、川崎、千葉、鹿島）に15の石油化学コンビナートがある。

日本の石油化学工業は、ナフサを主原料としており、その約６割を韓国、サウジアラビア、カタール、インド、UAE等から輸入している。



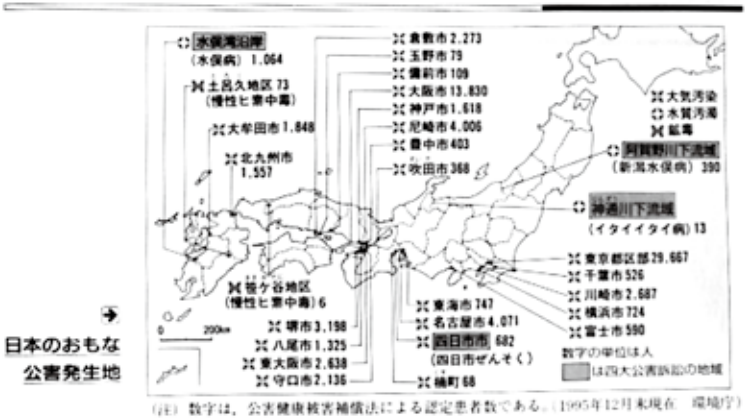
石油化学コンビナート

石油化学工業協会の資料より

激変する内外の環境変化に対応するため、企業間のアライアンスをはじめとする業界再編による企業体質強化が進んでいる。企業合併（2013年７月現在）には、(1)三菱化成・三菱油化合併、「三菱化学」発足（1994.10.1）(2)三井東圧化学・三井石油化学合併、「三井化学」発足（1997.10.1）(3)出光石油化学・出光興産合併、存続会社は「出光興産」(2004.8.1)（4)新日本石油化学・新日本石油精製合併、存続会社は「新日本石油精製」(2008.4.1）新日本石油・新日本石油精製・ジャパンエナジーの３社合併、「JX日鉱日石エネルギー」を設立をあげるられる(⑤)。

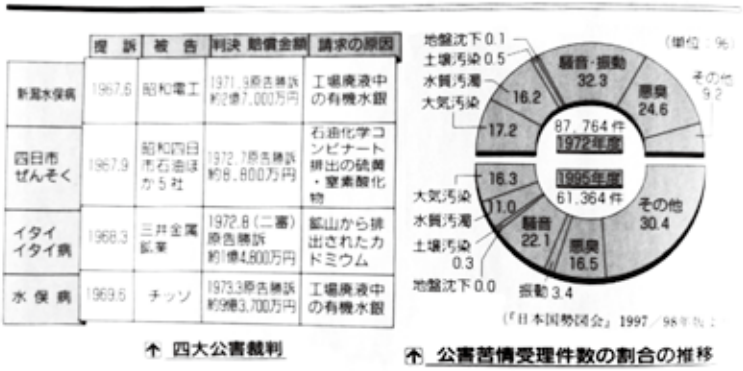
日本経済の高度成長期のわが国にあっては、公害が大きな社会問題となった。対象となった被害は、大気汚染、水質汚濁、鉱毒であった。中でも大気汚染は、窒素酸化物や硫黄酸化物を原因物質としており、工場の煙突から排出される亜硫酸ガスの削減は焦眉の課題となった。太平洋ベルト地帯に配置された石油化学コンビナートにかかわる自治体でも大気汚染による公害被害が頻発した様子は教科書に掲載された地図によってもよくわかる。

いわゆる公害問題は、学校教育の場にあっても学習対象となり教材研究も活発に行われた。四日市では、大気汚染による喘息発症が公害被害となった。



（注）数字は、公害健康被害補償法による認定患者数である。（1995年12月末現在　環境庁）

高等学校公民科用文部省検定済教科書現社522一橋出版、1999年１月、27頁



	提訴	被告	判決 賠償金額	請求の原因
新潟水俣病	1967.6	昭和電工	1971.9原告勝訴 約2億7,000万円	工場廃液中の有機水銀
四日市ぜんそく	1967.9	昭和四日市石油ほか5社	1972.7原告勝訴 約6,800万円	石油化学コンビナート排出の硫黄・窒素酸化物
イタイイタイ病	1968.3	三井金属鉱業	1972.8(二審)原告勝訴 約1億4,800万円	鉱山から排出されたカドミウム
水俣病	1969.6	チッソ	1973.3原告勝訴 約9億3,700万円	工場廃液中の有機水銀

↑ 四大公害裁判　↑ 公害苦情受理件数の割合の推移

高等学校公民科用文部省検定済教科書現社522一橋出版、1999年１月、26頁

３．アジアの国際観光交流の在り様

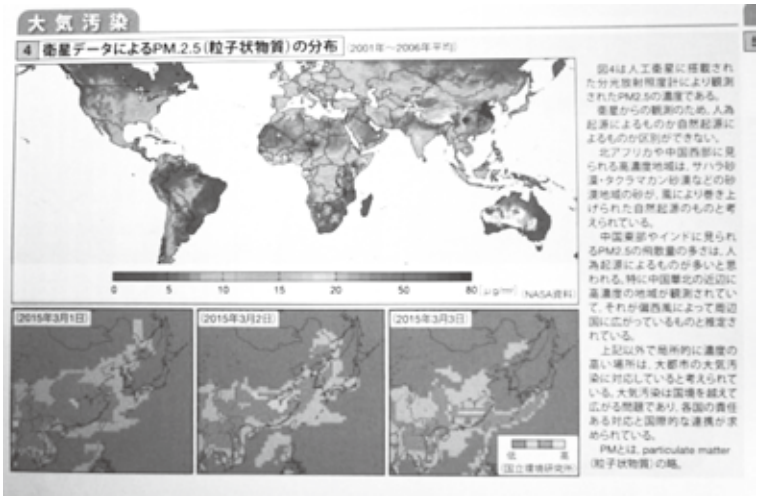
2017年度の日本地理学会秋季学術大会では10月１日(日)に、スタディ・エクスカーションの一つを、「四日市公害と環境未来館」を対象に実施している。その趣旨は1959年に日本初の石油化学コンビナートとして建設され、1963年の第２コンビナート、1972年の第３コンビナートの建設からなる四日市コンビナートは、日本の高度経済時代を支える一方で、大気汚染による四日市ぜんそく（四日市公害）によって、人間を含む生態系へ甚大な被害をもたらした。2017年は、四日市公害訴訟判決45周年となる記念すべき年であることから、2017年日本地理学会秋季学術大会が三重大学で開催されることを好機として捉え、四日市公害関連の巡検を企画した．四日市公害と環境未来館にて、四日市公害と環境未来館の館長、職員からの説明、四日市公害の語り部との交流を行なった。報告者もこの活動に参加した。

ツーリズムは非日常性の中に身をおき、その場所に臨んで様々な体験活動をすることでもある。地域と人それぞれの有する多様性を受け入れる行為、異文化交流である。ツーリズムの中で、近年関心の高まっているダークツーリズムはこの見方で考えると、犠牲者の追悼を通して、そこで起こった過去の忌まわしい事実と向き合い記憶し、そしてそこから得た教訓を伝えていくという行動のように思う。四日市公害と環境未来館におけるスタディ・エク

四日市公害と環境未来館の試み

スカーションもその意味から、ダークツーリズムとしての質的な側面を有しているように思った。

このように観光が地域や国境を越えた相互理解のツールであるとすれば、環境問題とそれへの対応を素材とした国際観光も大いに推進されるべきと思われる。「越境公害」などわが国も周辺国との相互理解は不可欠であり、さらに、新興工業国での公害の発生、新たな環境問題としての「放射能汚染」への対応などに観光交流が役立つに違いない。



高等学校地理歴史科用文部科学省検定済教科書130二宮書店地図311、2017年2月、140頁

参照ウェブサイト

①周南市役所ホームページhttp://www.city.shunan.lg.jp/

②川崎市観光協会ホームページhttp://k-kankou.jp/about/index.html

③四日市市観光協会http://kanko-yokkaichi.com/

④四日市コンビナート夜景クルーズホームページhttp://ykyc.jp/

⑤石油化学工業協会ホームページhttps://www.jpca.or.jp/index.html

【参考】

国際セミナーin奈良「アジアの国際観光交流について」

奈良県立大学・上海師範大学／中日人文地理観光研究所　共催

日時：2017年10月15日（日）　13：00～16：00
場所：奈良県立大学　地域交流棟１階　小研修室
13：00
開会の辞

基調講演

※各発表者の持ち時間は1人45分（発表30分と質疑応答15分）
13：10　～　13：55
１．王　承云
上海師範大学　旅遊学院・会展与経済管理学院　院長 教授
「観光地としての北朝鮮の魅力と問題点について
ー中国観光客の視点からー」
13：55　～　14：40
２．小松原　尚　奈良県立大学　教授
「日本の産業景観を楽しむ」
14：40　～　15：05　休憩
15：05　～　15：50
３．遠藤　英樹　立命館大学　教授
「Ｂ1グランプリの「欲望」
ー日本のフード・ツーリズムを事例としてー」
15：50
閉会の辞
16：00
閉会